

更新日:2019/2/14

◆カンキツかいよう病越冬病斑量調査

かいよう病の病原菌は細菌であり、病原は強力な伝染性・流行性を持っており、防除の不徹底や好適な気象条件が揃えば、たちまち大被害に結びつく。

●発生と生態

- ◎病原菌は、主に病斑中で越冬し、春先気温が高くなるとともに伝染を開始する。
- ◎病原組織に雨滴が当たると、そこから多量の細菌が飛び出し、次々と伝染する。
- ◎伝染は、生育旺盛な新葉、幼果、夏秋梢葉の若い組織で起こりやすく、樹齢の若い樹や軟弱徒長の樹で多くなる(特に発病した夏秋梢葉は、本病の越冬伝染源となる)。
- ◎風速が6~8mを超えるような強風があった場合、傷ができやすくなり、病菌の侵入が容易になる。
- ◎また、ミカンハモグリガ幼虫の食害痕は、重要な侵入口となる。
- ◎温州みかん・ポンカン・八朔などは発病が少ないが、新品種(‘甘平’、‘はれひめ’等)は感受性が高いので注意が必要。

●病徴と診断

- ◎本病は、葉、枝、果実に発生する。
- ◎はじめ水浸状の斑点を作り、やがてその部分が盛り上がり、コルク化して病斑中心は破れ、周囲には水浸状、後に黄色の縁取りがある丸い斑点ができる。
- ◎葉に激しく発病すると、早期の落葉をとめない、緑枝に発病すると枯れ込む場合もしばしば見られる。
- ◎果実に発生すると外観を著しく損ない商品性を低下させる。



葉での発病



果実での発病

●調査結果

表 伊予柑の夏秋梢を対象としたカンキツかいよう病の越冬病斑量調査(1~2月)

	H31	平年値	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	H22	H21
調査圃場数	192	-	183	183	166	157	155	136	134	131	119	120
県全体 発生圃場率(%)	56.8	42.7	59.6	49.2	39.2	46.5	41.3	51.5	57.5	29	26.9	26.7
発病度	4.5	3.7	4.4	4.7	4.0	6.16	3.72	5.05	5.49	1.6	0.8	1.1

平年はH21~30の平均値

◎本年度の発生圃場率、発病度ともに平年に比べ高くなっており、注意が必要である。

●防除方法

- ◎防除は、3月中旬~3月下旬の発芽前防除、4月下旬~5月上旬の開花前、5月下旬~6月上旬の落弁直後、6月中旬~9月に実施する。
- ◎この間、強風を伴う前線や台風の襲来が予想される場合は、その前に迅速に防除する。
- ◎また、夏季にミカンハモグリガの防除を徹底する。
- ◎薬剤防除と同様に耕種的防除を行うことも重要である。
 - ・風当たり強い園地では、防風対策を強化し、被害枝葉を取り除く。
 - ・夏秋梢は重要なかいよう病の伝染源となるため、発病夏秋梢の処分を徹底する。